佛說天爾波抄

三

人 刹
1264
3

俳諧天尓波抄巻之三

早稲田大学図書

○十九家

○曽家

ぞ

凡ぞといふは[illegible]上を受て詞をとゞむる也。[illegible]

ていふ有り。その[illegible]義。人の心を[illegible]有るには、[illegible]の筋へ思慮らせ。其の

筋をつよくする詞也。[illegible]と同じ[illegible]

古今集「花[illegible]」[illegible]この[illegible]

[illegible]人の心

[illegible]馬[illegible]

[illegible]重く[illegible]門[illegible]

へ5

味とりくせもとこ。これよりあくぞ。法師の行ひと世ようらで
ろ見ともをぐこもべのんぶ人とも。こくいあて。こそいてあきこくや
決をとりてさきりく決定の生うこあるのなりぐ法言とぐうて
つりくえ。ぐの字ぶをぐこもこくいうそし紙。今の字のお紙五寸
言よりさ出るるわぐんあしんをと角りらうれ生るぐ。
ぐよ三河あり「つむるぐ」「うとうみぐ」「中のぐ」但コノ中ノゲトイフニハ
ナリ。ナホ下ニイフベシ　これかり　畧スルト畧セヌトニ例

○才一　はむるう

春　柳よりぐ伝ぐこらく　鞠なりやや　重五

この白柳よりき伝ぐ蹴鞠ようとうのすぐへんをと
せくさこの子ぶをとやくるあし

炭　年よりもぐ春うくうぐ生ぐ　智月

集　蛤の二見ようれゆく秋ぐ　芭蕉

日　かくうぐ宿る業汁ようぐし　〃

日　ようぐ竹ぐくとうみもて梅木立　〃

荒　うりうとまのうろぐおとぐ寺　亦山

日　雁の鶏と鶉とくうぐ生ぐ

乃くくぬころ佛ようぐ　蒔き

春　さふうの菊ようき白ぐ　越人

日　ようぐ　みくぬ　けの雨ぐ　重五

冬　秋水一斗　ようぐ寸板ぐ　芭蕉

炭　詩ぐうぐ大根　吟坡

日　雪の日ようぐ　みてぐ　依し

題竹やの食

徳　ぐくぬ　ものあぐ紙食　曽良

[illegible]

○ 廿二 [illegible]

[illegible]

荒 [illegible] 長 [illegible]

[illegible]

集 [illegible]

芭蕉

同

猿

荒

続

猿

炭

同

風雅を吟じ音秋節する八雲が道　同

こゝに来てなにとやらむ舟の中　芭角

初もよしさが金一枝いとゝ　也紅

百かさねくゝが和ぶ唐ぶゝ　木節

かゝるべき鶏すらもて啼ぐと　李来

岩が母で乳に縋れる生きて　祐甫

うづまきの一枝たゝむまで夜の雛　芭角

こゝの白ちとづゝく。いつまでもその所習のそれ

きかのやちんあり。どゝんとうけくみるべ。ちりぐ

かりとぐりくその所習ものは思くする初くとゝ。

又こゝとこゝやこゝとこゝやこゝとこゝ

ゝてこゝとこゝやこゝとこゝ

猿　いかしらく蔵の苔のるるなるべし　里来

この白のこゝとゝ。れも上の孫のるるあるやくんべ

○寸三　中のべ

こゝしこゝの白のこゝ何ぞ何る何ぞ何き

かべつこゝれく。こゝれこゝの字のりとあるこゝ。こゝの字体

とゝひくこゝる等の詞くこゝ。こゝくこゝこゝ

別こゝこゝ。こゝこゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ

ゝくこゝれくこゝ。人こゝれく。こゝ。こゝ。こゝ

こゝてこゝこゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ

ゝこゝこゝこゝこゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ

ゝくこゝ。即寂滅為楽の両人思常する詞

越人ト吉田ノ訳ニテ

荒　こゝくこゝこゝ。こゝ。こゝ。こゝ。こゝ

芭蕉

いる。こいねがくこと。これもとぞんじ[illegible]
二人でなるこのこのれ[illegible]
そこらびうれすると。「[illegible]」
めるこ。吸ものぐ[illegible]
まで。女とあるこぐ[illegible]
じこもこと。[illegible]
ほせの仏こ。[illegible]
霊のこうりょ[illegible]
ぐるもし。蓮[illegible]
こし。これひと[illegible]
なこ。こぐるん[illegible]
うちをこく幸こ[illegible]

[illegible]
こ[illegible]
ちこ[illegible]
一下こ[illegible]
これもこき
うの花し
併[illegible]
きのこ
ねいこ
若草こ
こ[illegible]
こ[illegible]
こ[illegible]
こ[illegible]

[illegible]
荒 ちこ[illegible]
〃 一下こ[illegible]
〃 これもこき
集 うの花し
荒 併[illegible]
後 きのこ
荒 ねいこ
〃 若草こ
〃 こ[illegible]
〃 こ[illegible]
〃 こ[illegible]

里東
吉次
野水
水松
芭蕉
[illegible]
羽笠
水松
[illegible]
〃
男[illegible]
毋泉

同　灯ちらくうごく月ぞおぼろなる　野水

俵　たれんこの藪かく風でまたかなし　野童

瓢　かすがゆるあふのゆふべぞ世ぞびゆき　荷兮

員　下駄ぬぎすて袖ぞまめく咸　[illegible]

同　馬見へりきえずつゝでなくなる　冬文

春　花の蝶のまけぞさむき露のくれ　杜人

集　菜よりもうけすその鷺ぞくれかしき　芭蕉

同　口きりに堺の庭ぞなつかしき　同

同　霧しぐれ富士をみぬ日ぞ面白き　同

続　駒鳥のねぞ似合しき白法師　[illegible]

瓢　なまよみて稗のさかぞあはれなる　芭蕉

員　袖ぞ青々さがの法輪　[illegible]

此月ぞ例に下の詞をしつらへる作あり

春　あくぞ花見の帰り八唐鍋にて　旦藁

冬　今ぞうしろ入矢ひびく河声　荷兮

春　鼓ひとつたちけれぬよそぞ末ちの霞　重五

ここに加へたる詞をもて此例かなふと知るべし

○また

集　やしぞ吹かなふくしをずいそがし　芭蕉

この句、并るてかさしらへそらあわやねるを、前ぞ作りて

此例にあらざるなり

猿　あやまりく猶ぞ楽さかる鯆かな　尚白

此句などもつりあひよくしてねし。これおもくのがれまへなる

事をわざ、ぞの字をおくるまじきとなるときはかれ

さるは例のくはつかはしもじやうしぬのゝみせてれかゝりけん。
されどこれは上古集ざりしは例なりともあれど。さしもひとの
たがふるとも。ゆめくつかふべからざるなり
○又何ぞ何をと結ぶ例のごとくにはことしるなあり
冬　かづらいふしのまさず　かきゆき　四ざる
これらも。これらこくしのもむずし問ひかへて。その集のなかなる
すなはちいはれらえれはしるしやうるつ一ひをしちもと
西にも例にあらずるや

こそ

こそは。これらはれしは詞とつゞめるんかゝる御結ねよくて。
ことこのこれは詞と　これら詞と　相及ばるる好きんあるはそうの
あり。これらは。ものくひきはくるところあり。

しむるにわかるゝで。（コレハか結ト結トノワカレニテカクハナルナリ）ものけうくちがめあく
かりしこしかけむひとつけるの天爾波まわれど。いてしめの関なる
詞かなるは係ていかなんでなるが。古寄の拍子をのかなるか
えらうせとれわ。されど古人の心ならぬあつはるなれど。お
のげうとくしよそつひあつる事なり。まことへ人をみて
ずもとべく天爾波は。言霊をひ仔あのるなど。その寄よりの句は
あくらえ　こそもこふべき所なし。ころうんやうかならずけらぬ
よかり。このひとつくかぎりかまなる。つゝぐはこれをのて。こそ
後世寄によみまぞ多くよに擬しる天爾波なれど。しるよりなり古
今集の　榛ゆるひろくかまつてがよなるにも挑され然のもとてる寄ぞ。
ひをなみをうるむえあしねどもしうゆる如ばもやて。こそよもあるはく
あるやのくさまつるぞ。これらはこそかなる詞あらし。まる同集「こそひ

かるく閑やさるぐ山のあさぬ[illegible]ぬ[illegible]あぶ波たたくとらつく[illegible]
やまとしつぐ閑をあぶ波のいるぐるこんとらんおぶ[illegible]あるこ
し上句あるこ。一れとるうんふぐ。穀とりとるべ。かるとわるとる
ぶるく言わるもんんあるとさしそとむをかゆのあやまりくや上
古よりとあるるのぐうくんるるつぐ。これとをめ
て。さくるとりくさのをぐへせるつりさぐまるする天水波く
るわるこ例あり。下のちあいの句を異とる異やあるり

○廿一 あるるる我 異セヌ例まをし

冬 歳りのおのが書るる我 異るる絶 重五

此句くるのまるつ[illegible]んにくおのるぐるるるぐるるこ。すて
まぐやるるるんるるるるる為るる。これるの[illegible]るるる

集 元日 白魚 白魚毎の日る我 芭蕉

白 白魚 價あるるるるる為 日

熟 冷物 味のつるる我れ 湖頭

拾 こぐるぐ 餅るるるくるの花 芭蕉

荒 ゆるるるる花まる宮るるるのる 露梧

○廿二 めぐるる我 こしハ異スル例まをしり

荒 されぐる我あるるるるる乃 [illegible]の宿 芭蕉

この句るる[illegible]るるるるのるるるるるるるるる

るぐるるるる異るる。これるるるるるること

ゆるくるるるるるるるるるるるるるるるるるる

るるるるる。異るる異やあるるるるるるる

拾 科のくれ 異る 注るるるるるるるる 芭蕉

[illegible]

かくのごとくいとしもさきまきて天狗なるわざをなす[illegible]
うしいおぼえなく言靈をもすべなくいづれも今一事の怪[illegible]
音とさしつかくしかくるこへ人のこゑにしてかくの[illegible]
こゑをするんなり。さるこゑ今所謂の方言にいふ天狗
はの怪をなすまでもしかすべくこれをいふべし。天狗はつ
ねにこれをなすものと所謂をひく所謂はこれをなす為のものなり。これをなす

[illegible]

○又[illegible]の天狗彼掌の[illegible]
で人の隙をうかがふ[illegible]
下の波家をもあるやうにもぐ[illegible]

○手家

を

をとは天狗波をいふ[illegible]
[illegible]
にやせんにこやせんなどもいふ[illegible]
[illegible]
ごく[illegible]ソレヲカウスルとは家の[illegible]
[illegible]
て[illegible]

[illegible]

こゝろ得ることかなはず。書をよむにもことばの意をしらずは。さればむかし
物知る人の書をよむといふものおほかれど。よくよむべきものすくなし。かくれたる
事どもあれば。さらにすべからくおもひ。ふかくさぐりてしるべきわざなるに。けれど
うるさくて。さてすまし。ただ物知り人をよそにしてすぎぬるは。ふかきことの字をつゞる
べきなし。古今集離別の部の詞書に「人をわかるゝことのおほく「人に」と
ふかきこゝろなく。古来国学者。これを知るかなきといふ。これすべて
国学者の逃詞なり。けさくひたる国学者の逃詞に「音通」「通用」「や
すめ詞」「助辞」「畳語」などこれなり。いかなるもこれをひとつにせず。ひとつ
ひとつの字がなどに五十音をくつがへり。これをかよふといふなり。さるは
いかにもよかるべきことはあるらし。今わりとらんは。かくすることも出来べきは
あらぬさまへいかぬなり。これ逃詞なる詞なり。よく志ふかくあらねども。まさ
にすべからく今は逃詞をとりて。いかなる道にもあらずや。

かの下書にすべてをときまくにしるしたるかくおほくかならずねぬさる
べし。されど別るゝ事こゝろえあしにならぬ人ならずよしとわかるとかよふ
ものにく。ふかく別るゝ人をとおもふなど。わかるといひて。別るといふとかりぬる別
とかやなかるまじ。なるわざの別に心得てさとらぬなり。又といふは
世の俗語なると。俗語ニハカヽル誤多キモノナレバ二語ノ貴キコトシルベシ まことの国学者ち俗
語とても無下にすべくにもあらず。かのなどいふなることは面目もなかるべく
ことなしとずや

猿　うき人を枳殻垣よりくゞらせん　芭蕉

けふ白き。うき人なれど。まことわがおもふ人のことなれば。いかにもくゞらせんと
とがむべくもなきまでの心にくうおもひたるを。別といふる也

猿　いちいちにかゝる馬をかしてひろる雪の暮　嵐蘭

炭　なみ袖をかへしてみする　その姿ひ　利牛

荒　あつまりもむつうしきりとなく雁　紀人
同　わうまく松いとする花のあるじか　路通
炭　この島の鐵鬼とする月と花　芭蕉
同　年よりとあを常住ねもとく　利平
続　ひかーや坊うしはやとつ親るつり　治国
同　うしの野じを大虫うる境ふる　乍木
同　巣のはやま多を綱うしく歌蒸　峯花
荒　ひ月雨や松茸を出す市の家　松芳
熟　編福のおとうとつ武うしかく　路通
炭　そつち坊うが上へあげる寺　利平
冬　こしを木蛙の鐘花をうに　荷兮
熟　ひくまわくいるる踊の肝をいり　路頭

冬　立やあきまくる論海をうた　芭蕉
同　傳あいうまず歌をかの世　羽笠
続　待を停場うあへ地にし　曲翠
同　いろじきまをあけるすぐうあ　海力
炭　仮の中なる年とする月　嵐雪
集　うぐひすや竹のあ暮と花をく　芭蕉
員　ひくあ年ーを形礼もさぐりとも　松芳
同　ちむの暮と　振ろ　引ぐや　汐雪
様　年ーの秋雪や経又をきげばふる花　長和
炭　麦今ー　弓日んのあるが俗　野坡
員　ひる　府中ー　を餞ねぐりゆく　野水
冬　江を西くく宿楽庵とせを拾く　重五

春　傾城絵を　こうく　次　あけぐの　昌圭

○まつぷけのうちあつべき　詞　此　墨　ゆ　る　例　あ　か　ん　え　た　で　れ　ま　ど　の

ち　り　こ　ぐ　と　ま　ま　の　墨　ま　る　詞　と　ら　ま　ま　を　み　く　ん　ど　し

猿　福の花これを佛のみやげかな　智月

炭　枝おぐくけぬなしを。特スル　枯か　湖春

荒　先いとへ枯をとんのみとごもり　芭蕉

同　里うすむいつべいるのさうかな　吟水

同　沢庵の墓品川ニテ人ニ別ル　限トスル　秋のくれ　文蘭

同　ちぐれく傘ニ　言うやと雨風ふる　毬汀

続　おのげうまのこうるをぬるふる　圃蕉

猿　ひとをや聲のねぬらを。思ス　秋のれ　山川

月　低者ひれくきぬ峯をゆくふる　梅妖

同　ちぐれ花を牡丹のすぐふる。上スル　全峯

員　月の月利ぬ。上スル　もり秋の夜　狩子

炭　枯れなる木を三月尽　利牛

流　おぼろと白酒ちりのるぐりか　文考

猿　ぐるまと吉次ヨシツグ　有徒十人ニシテ東宮スルほ有ノ餞ニ　冠ぐるまるぐりか　其角

る　花ぐるま神田祭　大ぐるまと。ぐるまるふ　肖柏

冬　寅の日のあるぐるまと。大切ニシテ　餅治のとく切く　苔蓬

同　根掘山寺の体を。ナルテ　お茶さく　言文

猿　枯のあやこの一筋を。ナスベテ　蟷のこう　春角

月　酢壺や明石夜泊　るぐるまのと。ミレラン　ぬの月　苔蓬

続　るぐるま　豚と。ミテ　大事ぐるま　日

岸　細工賣のちつぐりと。サスリニ　ぐるく　朝年

これらいづれも略せる法なり。いづれの天爾波とくらぶとも、おのづから通ずる
なれども今の歌に略すまじきことは略すまじく天爾波なり。
その故に上古の詞はかへりて天爾波を略す。かの例のごとく コレヨカウ
スルなどいふはつかひざまよく歎息のこころは略しかへりよくきこえ耳ざはる
事多し。これ略せる例の始めなり。かく上古よりつかひきたれど俳諧まで
もなほよろしく然るべきことなし。いにしへの八雲神詠の「その八重垣」との
さぐりの國史中 萬葉集中など例多し。
○又この略例のやうにくらべつけて聞ゆるもあり。上古ノ例ハコノ類格ノ外ナリ これ
を ねぢりなどと名づく「ジヤニ「ジヤノニ「ハニなどいふ俗語のかはりなり。これら
も義はさりながら、もとよりさしあるまじきにこそあるかなど
推はかれん。するから上までゑくに害せず。よくくらぶべし

徒　さび川の床（ジヤノニ）ねも釣瓶網代かな　丈艸

荒　さしく菊や古き額ぐさん（ヨウノニ）秋の色ね　呂水

炭　いそがしき時を（ジヤノニ）雀の樹種　洒堂

上の例のひやうし「てる」など略語を用ゐぬれば、只句中を餡ねずのゆくなど文句に、ゆかし
き詞などよろしあはぬれど、略例にてあれども、此かはりをのけとすべく
かなる句中ジヤノニといふとなれり。これまた例のなき義なれど、斯よ
てく。このごとくもちつゆる多し。即この霊まさの例なり。そのかはり
「やと「ハと「どを「ざりしを「すりしなるぞつゆるもあし。いづれもこの
例なり。これらのうち「あとをうつされる句

集　さくらまあるべきものを寂しし　芭蕉

口　ひるがほに晝寝せうもの床の山　口

この段の句。あまたありけれども「あと」のかはりて又俗語のままに
つかはれたる句あり

拾　ゆくけや鯛しあるのよ書分別　芭蕉

字数こそねぢかゝまりいふの俳諧の徳なり。されど一二とへといと
いゝたるのこもる字の言葉におくく深淵大事とかなる事と
○もとごとよむべく。もといふの言葉人のおもひけぬ三つなるを
をきこすべし。濁音なるを。もといふ字もゆるしもひとつはしく
句が同じくかまむかるべし。何下の其れ字をあそばすべし

波家

[え] えしいふハ。すべて物を引うけてしまる詞也。されどもそれは
んずべきものにてあれバ。ことつで。書を本とす。移り替るものなりかずの字し
引うけるにてたれど。これよりは定まれる事なれど。ここ文
にひろくいひつけくいふでしめすべし。すべてかずの数は。はの字あり
此あたりつぎ。今月十日也。所ハ象潟かでかのほとりの宇を定むるに

きらふるの字なれども。今つき九日なれ。又は千百なれ。まぢくしき
事ある時。今つき十日など引うけおつるんし。所さとのみ。三條より
四條とか。五條へまでぢある時の用なり。この心ちがひあるべく
おすぐ引うけてこゝろるへし。西面がゝりの事なきは。はの字を
三月なるのなか三るべし。世かよ。これとえてなどいひく。間の詞も
なるとその引うけくるかこゝろえんとのんなるし。されど物その底を
の。そぢくしてぢのあるに。引うけてきする詞とこゝろべし

読　家を背杖よ白髪の墓まゐり　芭蕉

此句ハ蕉翁故郷まかりてくかくに。多会ことすまれし時の句也。家とハ。
久しくつれざりし翁の句也。家と出れくのち。されどえ年とも
かくれざりしんよむかりくえと。いくく年へだてしとおどろ
きしれさこたされるし。ほ世の人さ。かぎの所く人間かず。宿を落

走人ぞりとかりめとつるぐの風とものく。なのれとかりとと
かくとつるぐ来かり。かくのごとく。すべくとぐめて留くの風と
とくぐ。出陸つりいあやまるるよりらまぐ。ゆく。これを「清むと「濁る」
の二例あり。清むと

猿　秋ぐやくくもすくるくうごく笠　子尹
〃　名月や訪る寺の茶の未ろ　男秀
〃　やがく死めくゆくみず鞠めく　芭蕉
〃　茅むしやゆりるるく花の奥　半残
〃　海人の苫く小海老まぐるいぐ　芭蕉
〃　初ぐらく鶴わる間のさうるる　風麦
〃　くくかやや蟹よまくく夜八月雨　日
〃　春く三月あけほのく空　野水

〃　市中くくものけるいや夏の月　凡兆
〃　ぐくくぐぐはくまくいくぐ　智月
〃　花なく愛うくく葉のかくいく　凡兆
〃　くくんのれくうく花のつばむ時　去来
〃　今くくゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆの鞠　旦来
集　山ぐくく茅屋おくくうくれむ　芭蕉
続　一すぐく花野よ通し　畑　芭
〃　蓮　蓮は年の春の三所か　鳥巣
〃　三日月と草のやらいゆくり　百歳
〃　徳くうくく葉く花く梢る　望萩
〃　時くく水く揚くり　川　柳　然者
〃　暁くくらぐれくく旅姿　志元
〃　我等

□ 義屠を末のさがりに永くぐり　山輝
□ 何のあれこの乃れ名つて大師講　如行
□ さびしさは義をもとりけるる巨燈不　桃先
□ 雪をよりさぐめく里を森はふ　星園
□ ちづくゆや醒るを客の影ぐし　芭蕉
□ 冬川や木枯を里き岩の間　惟然
□ 牛のゆくあとく枯野のさびかな　梅舟
□ 鶴鷸家ことぐるくさぐれ雪　祇甫
□ 花の春ことなのねよゆぐるん　童友
□ 山寺孔をもち開こうてり花　東海
□ 三日月の東をくるく海のうら　芭蕉
□ 秋雨の蘆うらぶくうらぶ　野水

□ うき家をけうしらかさゆる丸新　杜國
春 萱草い咲ふ春き　荷号
□ 馬をめ牛きのれ村しぶれ　杜國
□ 尋ふ恋うき涙花の　芭蕉
炭 ひぐらふしらぬ軍の大事也　□
□ 恋をの春ふ蕎をたうき　其角
□ 陽ぐを中ぐの男の荷をうく　野坡
□ 山びの葉をしし秋の霧　□
□ □のあるうけあ毎竹のを　孤屋
□ 寒く恋別一家く多入　挙
□ 寸はしく沼で人をぬ　□
□ 秀の穂をのこ吹倒き　野坡

荒　すゞしくも柳を風にとりつくし　一笑

同　みよし野をいりよ秋の月　見ての花　旅笠

同　衣がへや向ふなきの夜の門かな　路通

同　いそづるやきのふは東けふは西　其角

同　さびしさや薬井の宿の冬の家　舟泉

同　一里の渡しきらり白川やどり　一井

同　嗚呼なきとも　あまたの書　岱水

同　駒の鼻まくらに伊豫のかい甲斐　野水

瓢　遠きあくまりきのふ分別　芭蕉

俵　男ハ紙のともし　なき　土芳

此句前句ハ一失後ハおもひくづれめ、恋としてこしたり。コノ前句ノちひらぶれめトイフニアタリテヲトハイヘリ。思ヒクヅレネバ身モ赤サナウニアルベキコトナルガ故ニ、ヒトツワケテ、コトワレルナリ

こゝの例も、下のつけざまも前に同じ

○まことにかくも、かるく打出で新しき、家と重るる句あり。されど其例多くもあらねど、手見かるがるといふ、みづから思ふらんもの也

荒　あかるき去年の古葉のほかひかな　防川

同　乃葉つむあしく木の新る畑かな　越人

同　鴨実ハ萱津のあるかな　冽文

同　月花のそぶめく　[illegible]　鈎雪

同　春雨を伊勢の宮つぐことよ　渇水

これらいづれも、かるく上の句の落居よりしらるゝなれど、上の物語にしてよせたる

かり。手のくよりいまで其例かれど、これそかの俳諧の字

のゆゑにして、いづれも雅と俗との上をかけて、両と思ふものなし。さりとて

かくつかひなさて、せくゞりいで、詠歎のくかもかなく、ならぬ　[illegible]

荒　　一樹

荒　　鶯

集　　紹鷗羽　　芭蕉

日　　日

○毛家

毛

たゞしもの字乃術なる事なり。上すゞて餘りなりしがくしずかく天命
法なうずして抑まあらず。元神の理にいすのなる所あく散せたる
まかなう。三つなるそしてを無義となし子時く。我より理をつくして出
すワざなるなるに。かの竟なくなるをし。予なるよ言の道は忘れんまで
神道とはしるべしといふよりのはにくいたよ。神たるの教ひとへてよく
なあくまでなりまでそのうなるがくいらく我よりも教えてもなくはやくぬ
しるなり。されども其の理由ぞ。何事をひらく何となく人のんなはものなきくれど古
人彌子などのごとくし。誠なる故といふ言と竟を殺すがあよ神たるがしなる
なるべくよみのみならずあるけれど。すむとなくそをなすは何ありの目よりやうく發
なりじくサ字なるまで。ひとくこれを無ぐずしてて。魂を入することをすべく
ず。この所着をひらく所なるは立てさしかるめよ。天命法といふのふあるなるも
寺首をいふしし。これなうなく。あらをも脛めなりとなくうらやさき

てこ上形も海めなること。きらくへのんとあつくなりのまよりたるは魂まで
いかずかしずくも無しまりなるなく。古今頌ぞいふまじ稀し。抑くもよ
よきらく。ワざと東方をいふでものもあそくその外をも四面あれどもさて
そ天命法をつくるべくしずこの志とよりさにいひはかくしがらし

猿　合歓の木の葉ごしもいとへ星のかげ　芭蕉

これは七夕の句なり。合歓といふものは夜になるとねむるなり、さればご
にて。牽牛一年の間は。陽つるといふの間なくかならずおめし。されど
二星の逢ふくあの七月七日の夜なれど。されどの陽をもつていふなし。さらく
此れの字乃んく。合歓の葉ごしをもつてその字なれど。ましく他乃
度牲ふ大葉なる木の葉ごしを。なくくらとしらるゝぞと。人めとなくんやう
なりとらいふなれるぞ。これらの度ならふる木をひらくさらく。合歓とうつで
さらとくりまし、あるらなると。別の字はらく所なりと法されなるかなしも

の字共面倒とそつぶやく

炭　雲霞（紙屋ヲ品川ニテ送リテ）　野坡
　　こゝろぶくしもおるべしの事
日　このくしもまくらの下に日し　杉風
春　蓮二　枝も　ひろまる　うぐ　蕉人
　　前句「むさぼりよきあぶらくあかく世ゆゝと冬文コレラ前句ノ絹ニアタリテセトイヘルニアラズ。蓮ノ報ヲ思ハセタルもナリ。アシク心エナバ。前句ノ絹ニアタレルヤウニオモハルベケレバ。弁ジオクチリ
猿　うらぶ月よ。鼻つぶあくま　蟹うるぶ　凡兆
炭　鬼のつら錦をすうるも　ひいかり　柳竹
員　みるもうしこゝ家紀伊の門祝ひ　胡及
猿　文珠の智恵も　乗特が思癖　蕉人
猿　百姓も　まるらわけく　常摘奇　素堂
俳　人の乳もかく　寒ぐ　うの　掬　沾徳

猿　若　楓　夢ぐ　なる　ひと　盛　曲水
日　思ひ作やつる　祭も　鍋ひと川　越人
日　人ぐ似く　猿も　を組む　秋の風　除柳
俳　茨ぐ　咲ぐ　つるもの　鬼　蕪　荒雀
炭　この付ぐ　ぶ　指　指　ぐ　ぶ　ぶ　永雄
日　まぐこの　ぐ　ぐ　宰人　野坊
猿　衰ぐ　草庵ノ留守ヲトヒテ　庵の雪　芙角
日　和ぐれ猿　小蓑をぶ　ぐ　芭蕉
日　こぐ　ぐ　ぐ　猿雖
炭　渡河路や　花ぐ　ぐれ　芭蕉
春　ぐ　ぐ　の　釜　ぐ　野水
荒　蝶の巣のこれ　ぬ　猿の庵　湖通

炭　すみ川霧や猫の毛もえし川芸衣　楚舟

荒　うら白もそよげる神の馬屋かな　胡及

月　そまびとも月みる中のひとりかな　渭水

月　いざよひもまだ更科の郡かな　芭蕉

月　一本の茄子もあるるさかりかな　杏雨

続　よしの山もただ大雪の夕べかな　野水

月　冷飯もられ水くさし寛ふて　嵐雪

荒　ちらこぼす小豆も市の師走かな　正秀

続　二月や大黒柳も株のむし　野水

月　木がらしもちどりし島つく小島かな　同

月　こゝろせよ師走の市のさかな　曽良

月　翁草二百十日も恙なし　蔦

月　くみだぐり人は年よれ初しぐれ　芭蕉

炭　どの家も東の方は窓をあけ　野坡

○かさあむるといふは、よろづ業も薪もふしもたかきよしが
ごとくをいふや。ちかきこのかさあるも。後世つなぎひさげ紙衣ぎ。
そのあとの上る所を。上師の酒好なるは。雪牛も酒なしといふ
ことも上那も番弁といふてのゝしらんえゝり。されどされ言う
ざるべきなるは。その前行にくつる事なくそ。上那も番弁行
方よりもの案をつけくわかめぐし。すぐく正面なる物あそてその
そしかるものをどぶらしとくいふなれど。その正面とうけふして。やう行とも
といふ事あるまじきなし。ぬくひはくもかくれはす。おとらへ
くるいはの物たる也。この前よ。上師も亭主も、それを行
あからかなる内にて娘もかくらす正面のあ。言外にある

なりとぞ。つくるべし。[illegible]

墨斎の御製に

かるるもよみうるもみぐるしからぬ

とうたはせ給へ。このうるもの葉の

このみるかたにく。此女の容儀のうるはしくすぐれたるをおぼす御心と法の

しるべのうるはしめし。西面をいろあのもなるを。ひとつに西ぐ

とぞひとつうた。天和波のうるはしきを毎年あのひがごとく

猿　題藤柿舍

豆柿うる加もと本部屋も名所ぶ　元兆

これもひとつに西面なるまことにあれど。これにく味噌部屋も雪隠も。

茶屋なるのおもしろきなる為とらんべ

続　むかしくまつく西に栗も柿もしくの茅　法圓

昆　くるかきもまきくるかきも法師　傘下

猿　かりぐんもサニヨカ柳へとすもりやうの柱　羽紅

月　乾魅と宣也の痩も寒のうち　芭蕉

続　そひうるめ年も舅も口きいく　月

月　柚も柑もをぐるりの御影講　法圓

荒　名月や海も松もみず　青来

ちりいづもも言かは西のうるとぐるみぐ

炭　年の豆腐相の様も芋ちりく　晋子

この白かぐ名うる晋子白かれぐ。すくしゆうあるこ。いうと

ちりれぐ。この年の豆とふ豆の字。西面ゆるる白意なれぐ。

ちりこれと奪ぐくいつ時も。年の豆もみりんの様もとうん

にく。西面と他のあるぐの茅ちりうるむとうるとうること

ゆうもく。ちりぐくの豆とも。上ちりもおもの字あるぐのくはとかり

ちりうるうるほうぐ。ちりもく相月ぐふ年ぐ。ちんとうぐ

そあるまじきなり

貞　恵ミて玉子なりけれ玉子も一文ミ　野水

とみる句もこの例なりといへども上の霞のうちに侍る蹟が句の「今宵似る様もなきを似むといひて今いはず西国なるべく又きなかるものこちに侍る義が句の「喰ひ得る年も留まるべきなれども西国へ片言のこちなるべくきゆよくくわへ参らせつつひかやまするべし

○まやしつるく　やと類のやなり上の類のやをあらせてんぐ

炭　牡丹すく今まや花みえく　欅　渤

これに牡丹すくへるおの花をかへりてもすまうじ侍るありける花見へよきへい由だしらなりとよむ心にくけやを詠のやなりよく詠と類をさらちさるべし

○又までもこれよりつくいづれも下のきけでもずいれも同じんく（モシソウナドモアレバワルイニ）といふへるつつ詞しさわぐわし（がてあしん）うと葉じくや時なつつつ詞にしく是用言のうち詞なり例はみえず言えたいととくいへう詞なるわで句意よくよく論じつつかべくしくてしくは時侍持ならゆ

○又もあれまれ　まれも即ちあれの　づさらちにく同じかくしつるは「時すあれなどらぬさぐひとしこれそ時（モアノウニ）といへんと多くの書に重なる詞と（かさねてよく）「ミられこずまれなどつつてしその時そ（ミルニモセヨミヌニモセヨ）といふへんし又（ミテモミイデモ）とといへんなり

○又「何と何とか（かさねての）う詞あるこれく「何と何とといふべきが伊勢よ（五十音ノ伊ノ締ノ一）しうつるくみとかわらずらく手長くもの轉語とし古ぞよは「なかミなれずと「いけここしうつなどする（何タリ何ナニタリ何タリシテノナドノ意也）

○　仁家

又 はしく。今はなるへかなる物をうのうちのものゝ持あるさまくふ
詞かなり。ゝゝ。荷とりすの擔ふる人ふ荷かなる荷をうちのみゝぬ
ふの荷と云きをつりあくせる擔のごゝし。このんにく荷くくるゞ
くるかり。こしなりくさゝりかるゞし。仙ゝより上の句がうちのふ
なり。下をめのるへのふなりとんくゞ

続　味ゝしやさゝくの花ゝ擔げもの　車来

同のるへかゝくさゝくの花ゝ。同のるへなる擔げゞをもちあくやく
うの味ゝしやなりくする為ゝ。この同音ゝうちゝるゞみゝ
まつゞゝ。同音ゝくゝとする為ゝ。ゝゝ
みゝくゝ。ゝゝのゝかるゞにいつゞより。ゝるゝまくんゝるゞんゝゞ
べきなり

炭　ゝゝのくゝてゝ雀　鶴茶　利牛

これ〻〻鶏ゝ雀ゝ。ゝゝに服部のまゝ。ゝ雀をゝゝ。鶏と
うゝかゝくゝるゞかゝゞ。ゝのごく後ゝる也

炭　約束ゝるゞみくゝのゞ較ゝれ　雪良
続　緑ゝゝのゝ花ゝ。ゝゝくゝ　曲翠
春　初ゆゝの若葉のゝに杓杞ゝ　荷兮
炭　うゝゝ拘ゝ花ゝくゝたゝゝの月　其角
続　味噌部屋ゝ花ゝ三葉ゝ　乂可
月　擔栗や編ゝやゝゝゝゝ　沾圃
荒　ゝゝゝ　腑の後ゝゝゝ　芭蕉
冬　雑ゝゝゝ　野水
員　大根ゝゝゝ烏帽子の女五三十　荷兮
続　番の葉ゝ小路ゝゝゝ　沾圃

夏

里深く踊をつゝ二三日　七虹

日

ついたぶくりて落る精進　望水

同

秋風よし女車の髪男　飛鳥

猿

藤の芽ちらつく朝ゆふ手　芭蕉

同

竹ゆるやゆ畑隣り思大原　玄東

夏

人並よりぬぎ捨て花ゆく　釣雪

秋

枇杷の古葉に未芽ふくみ　史邦

日

初雪てり智邦のぐく初ぶけ　同

炭

燃しさる薪を風ふさくぐく　野坡

続

大きナ蓮のドンと開ゆる　惟然

炭

隣の小言やられて足袋と　野坡

夏

高くゆゆたるれ雨ふる一文に　野水

集

枝ぐてむりの一字あらん　芭蕉

炭

一下はすなりと雪入雪猶　野屋

日

わらびや生ゆ春捨て江の月又　里東

獺

庵てわらくまけぐ曾庵　智房

冬

銀よ餘りむ月を海　芭蕉

炭

俗に西国武士の荷のごし　野屋

日

抵竹の実を拾ふ　杉風

猶

搖ふりの抜ぬ赤柏　良品

炭

傘よりあらふる柳ふ　芭蕉

続

ふり氏やそゝぐ抜ぬと　支考

蕉

ふぐりすの色よりぐる所市ふ　市柳

日

かざり米よりぐる柏ふれ　一晶

日　やまの法師　理屋さかりに花の雲　杜人

日　いざのぶれ（スミダ川ニテ）　暁雪の鄙ぶりと新米　貞室

続　須萩て（イセニテ）　餞別の馬　よみくやくふ島ぶ　呂丸

荒　ふ風の馬　小原見て　茅を抜ふるさぶ　傘下

続　小原見て　茅を抜ふるさぶ　斜花

荒　ゆ月や　抜ふ水ぶる角田川　なく

日　俤ふ　白菊ふ　ぶ　飛河

続　乃ぶ　ゆふ　ふ　馬蒐

日　山ぶ　ふ　ふ　ふ　小浪

に　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　芭蕉

日　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　支考

俤ふ。ふ。ふ。

この句、本書く良材多き中れど、富うるに、あるに不自由なり
とおりに、遮る、ところにて、行土をつくするに、紙一といつる
なり。本とまつくするよくよく自由なるべし。土をつくする
とつるれど、これくく書たくたくなどいづれ所なり。この句
意をつくく。伝ゝゝデといつくるに、古くよりいはれあるものとおく
うるところぐし

荒　つゆぐもと扇ぐ山くなの寺　冬松
続　蒼麦まぐれる子山路ぶ　芭蕉
炭　まくくしく江戸でんくなる　柳翠
日　馬よ出ぬ日ゆぐ　芭蕉
日　ゆぐより菜ぐなくて花の宿　柳翠
日　ちめぐの中ぐより出子海鼠赤　日

日　いくぐ月ぐりぐこゆる　逢坂　野坡
続　やくくぐ梅ぐうらぐ　凡兆
炭　折くるくくぐ　野坡
続　八九間ぐ西ぐ　芭蕉
炭　芋虫ぐ敷の表ぐくくる　野坡
日　藤ぐすげる　日
続　屋敷ぐつくし　芭蕉
日　ちれぬ合点ぐ　沽圃
炭　ふく裸　翠
続　ぐくユま河ぐる　支考
炭　買ぐんぐ米ぐ　翠
日　又ぐ彩ぐ佛の食ぐ　日

日　戸でやくみ一居凡呂のやれ　野徹
日　ひろてこ今尽ぐ表・ぐへ　する　日
続　うこあぐ市一の中を押あ　芭蕉
日　ぶりひれまこく早　稲ぐや移て　里圃

但デといひくこの俗ものデの例とあぐるあり。うわこいてをまぐ
ぬ事ーるへぐ。たこくぐ

炭　これこたぐ保紙ましで里ぐう　嘉角
続　ちり枯あこりまるに鏡ぐみる　野校
日　清林ましで孝ーし公ましする　法圃
炭　ひこをあこましでくみま移ぐこる　野牛

コレラハイヴレモ。清音ノてナルガ。濁ルハ俗言ノナラトニテ。スヨデトイフトハコトナリ。古言ナラハ「すこて」「めチみ」トイフ所ナリ。さがハスベカラズ

続　老のりあれあるこまこで　芭十雀
続　絶あやこまやぐよぐ子　羽紅
日　ものけくとこでるりもくげぶ　松風
蒸　梭棚の出ぐこまこでるる胡蝶ぶ　梅餌
日　うぐくこもみぐ畑りりまぶ　玄茶

ニラハすーてトイフベキヲデトイフニテ。古言ニモデトウカラコナリ。コレハコ、ニ出スベキコニハアラ子ト。デトイフコノ、ギレヲワヌ重蒙ノ為ニイフナリ。ナホ下ノ不倫ニ出セルヲ見テコ、ロウベシ

これこたぐくまぐうぐ。さくまこ古言ぐくこ行くとつうぐく。俗言のデたんかる例とさこにあぐ

蒸　さり言やこ子篠行く隣で　路通
続　このむーやつのかりにく涅槃像　野水
員　むこまぐ実ぐこのかーあ行く　荷弓

歌句「こゝろやすげに土のうへにふなり」亀洞コノ句意ヲ見テ・コノ句ハ・テノ心ナルヿ知ルベシ

炭　髪おくれ面を踏とゝまる　正雪　吟歌

日　帷子肩よりこぼれ、見るさにて　日

荒　肩衣を腰にゆるせ元の夏　杉風

日　うゝ峯の松を花より切りわけ　蕉雨

集　うれ消えさよの中山にくすぶり　日

古いでれ〻テとつゞめば・古言のごとく・にくとけれる

○又上ニ「何ことひとつ」何ことと倒ニつゞ

事一あり・けづこゝろ・ゝ倒句のほう・上の字ハ無事ニ

下の字ニつく・義ニ・ことゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ・ゝ

冬　そ中のあく抜るうぐる　正月ニ　杜四

日　血刀うゝ洗ひ　月のくゝ事ニ　荷芳

春　傘のうらゝを付キ又なる　雨の音ニ　李尾

員　ゝ川ゝやゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　相の木に　吟水

日　こ生ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

是非なくぐもれば異すきつよあくぎ・いとでもさてもうがあし

続　さようさり庚申ーまちの亦屋形。　丈草

○まさ　にとりく・ジヤニ　ジヤノニ　ノニなどの伝授ようすもあり。

これも前さらの所のお蔵たぐつのう・半ぐ上下の事ぐ上り

て・かくはめるやうさかるく。

飄　この村入りやうと醫者のかりなり　荷兮

同　色めこころよ　用うるへ　ものき　乙州

同　なるとやめにおつる　釣　柳　女人

集　木曽の痩せまぐ歩てめて　陰の月　芭蕉

いろのみ引　みそ引　ぐ引くなど・ふるくの天糸波を渡くつりの

事ーつぐ・ふれくさの傳くとうくやくそれぐそれいつぬぐぐ

続　かれも蛾ふ　かくぐ侍内　法匠

同　うぐもすの跡ふくを雪をそ跡ふ　馬莫

炭　はもも跡ふくを丸太　うぐすす　孤屋

集　景清も花見の帝ふを七ふ法　芭蕉

俳　五歩ふくを跡　蒼東

荒　むさーつやいくを所ふくもみる時　永鼎

猿　かくふ跡ふくも雪ぐりや　野水

荒　月ふのいちふくを門の松　素堂

同　かくふ事ーのふくを俳三の月　芭蕉

猿　初博や骨なふ雪なふ桜のも　半残

同　ふくみふくなるに仏ぐる木槿ふ　乎蘭

俳　ふくを魚をすまもるふ白ぐ侍ふく　今雪歳

集　すぐしふくワぐ家ふくねまふや　芭蕉

○又||とうりく。にてとうたいようなるもあり

集　青葉しく沖目の雫ぬくるがや　芭蕉

炭　紙焼しあらびのくまり酒の粕　其角

荒　篝しくすごしや扇のさいり口　荷兮

○まこと「何」などなどの詞の中へ入るなり。寄せて「入」はなるべし。

「ぬれてぞぬる」「ぬる」「ぬれ」などさまざまつづけ。これも同じ

乃。せんぐりて地なくが撫子。なりゆくなり

冬　奥の二月を品かなでてしぶく　蕉

俗語にも「モミニモンデ」「イサミニイサンデ」などつづけり

○正家

【と】

とと。「これ」「あれ」「人」「我」などはつづけるなり。

その後とかくとも俗語なれどもすこし。くくくくこれなどもすこし。

古例あり。才一いけ一のとくらく。これをト見ルト聞クトニフト思フ

ト為ルとう五門の詞と。とのそれとらくらくや。平見トの詞を

そぶるなく。但コレヲムヲトシテ。餘ノ羽うまとくしたつるも拙

ヨモツケテツカフベキナリ

ヨする詞なり。くくくくくくで。人のくる所の西なるあをそれより

うちの方。むつりふみなるあへけるなるくしするんし　コレ五十音ノ本義ナリ

炭　花又とと。男ヲテ女をうづつまこと　芭蕉

荒　わつくと。隔ヲテ。ものくぬ董草　荷兮

日　かくくくかくくとを。上ニテ柳。これ　野人

日　かりくと。男ヲテ鶏引くり金の月　合咕

炭　かづくくと。イフテ生海苔を焼やをの奥　後仙

猿　すくくさくとこれと。イフテ松ノ下くれ　元峯

　　きるんくあくくくと。ニテ花見ぶ　立東

員　いのるゝ　ゆくゝ。羽織ら　空水
徒　陸奥　壺も　ひゝぐと。維　素
冬　口をゝと。癇　ちらぶる　力なく　空水
徒　人なし無　ぜゝ　ぜゝ　ぜゝ

猿　金鈴とゝ人よいてゝ　あのやすき　芭蕉

日　お留守するれば　廣き　板敷　凡兆

炭　よしの月　ぞゝしくもし月の雲　芭蕉

まゝこの例のごとくにて　おなじ人の例なるあり。

続　ゆりとゆ出す　京の道づれ　馬莧

これをゆりとゝとつたく。ドウヤラカウヤ　ラトイフ心。ゆとゝ字とつでハくゝい

ゆりず。ふゞ子べうゞ。

○又。あと誠くゝ例あり。これを上るゝやとゝるゝかゝ

くゝん。この下りをいでず。このやうにいはれく。なゞ誠しるゝ

なるゝし。こゝしまゝつゝあゝがの物とつゝる物にてゝつゝ誠しる

ゝゝゝゝるゝとゝゝゝゝ。そこゝ。ゝゝりてがゝん光ゝゝゝやと

ゝゝゝゝ

コロヅケ。

○ことばはうつりあひこれ二格あり。ひとつくこだ。トイフテ
上ニ思フテなどいふことつて。今ハいふて。ものりとくちむりしなくよ
などゝつがごとく。むかつのたぶをおくつくがひとさする詞

員　ちゝ　川　ことば　勝　角力　とく　永泉
甑　つゝあくく　大ちゝさ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　山秀
俤　米搗　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　文秀
冬　ものゞ　間のワ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　野水
茶　すゞめ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
なすひとつ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
猿　雅　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　印七
荒　上ケ　土　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　吉實

○貢二例　にのとトヲ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　

続

員

炭

〃

〃

猿

荒

〃

〃

荒

〃

〃

続

荒

〃

猿

続

炭

続

○第三例

[illegible]

[illegible]

[illegible]

それゆえ　まるぐ　白くしぐれて

但コノ白ハ、天ノ白トウスガトテ、雨ニウヒエグレタルトイフ心ナルベケレバ、第一例ノ白ヲヨカサマノ名ナリトガハスベカラズ

このごろうつくしきものの集ちつづくく。片方ひとつ
すひくびのつるに。ちんちうの。おこのあるこそれと
まゆひけくくん筆あること。時雨ゆうづくく白く
ゆくとちんちうあて。片方が主片方がまとかるあり。
何ごとかくまりて寄ちりて別に主
あることとそうぞし。時この白くあるこの白く有るこの
見のうをくまる意なり　コノ白ノ前ニ素ガ白ガ
トイフ白アリテ、アレノ白書ニ真如堂ニ行く光寺如来ノ開帳ノ時
トアレバ、コレモソノ時ノ白ナレバカリハイフチリ、又ハ真如堂ニ三ヒ寺
トテ堂アレバ、ソノ佛トニ体ナルコトヲイフニヤトモオボエキシ、ニカラバ
イヅレカマコトナラントノ心ヲ思ハセタルベシテ、フタツノ心ヲ含ムナリ

○第四例　にぐるとト云

雖とい言葉のうろや。うしまく。雖とうたく。つるぐるま
ものとやまひつけさやあるれば。年年を用ひ
集　月をあれど留守のやうや須磨の浦　芭蕉
えもあやかくるれば　きぐるく　路通
ひさ師とうたの口あり　北恋
口　勝前とうたの出るうむさか　梅車
岁　うれしうの時のうたの時の花　四俊
口　ちうくに居れど長年とまぐみな　同
口　坊うくるまで　やうり　仁平次　四年
口　ちうもいれどうく白をうす　四校

○第五例　ゆかり　ト云

つくるまでの節の間で、[illegible]
をくいてくみるべし。時代物にいとしかるべきく。これは俗語
語ふり。まわぐいてくふるまを歌よてみるべし。俗よ。ドウ
アロトて、ヨカドいてとし。集中例みな此

○第九例　ぐるりるやトス

をくるまぐるまの[illegible]ぐるりるやトス

事のいくたびもいつぶくゆくこころ。集中例多

これらの五例のみ。俗語よつてみと二種あり

続　なくなかりとこ唐めうしゆく秋のうぐせ　支考

日　鶏があぐるとやぐく暮の月　芭蕉

何かりこいふく。さいめなくさ[illegible]

意あぐりぐとこいかとこ。これらは[illegible]

○[illegible]天の波[illegible]登伊の友知るれど
萬葉[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
人の[illegible]。[illegible]
行[illegible]。[illegible]
定家の[illegible]と　萬葉二八[illegible]
世かぐりつういあまめるもの也。集中一例のみ
○[illegible]上の第五例よ[illegible]

集　うぐすて竹植るから蓑と笠　芭蕉

日　紙衣めるるもしもしん雨の花　日

荒　まくくふ木賊をみるの[illegible]　文鱗

[illegible]

[illegible]

[illegible]

炭

集